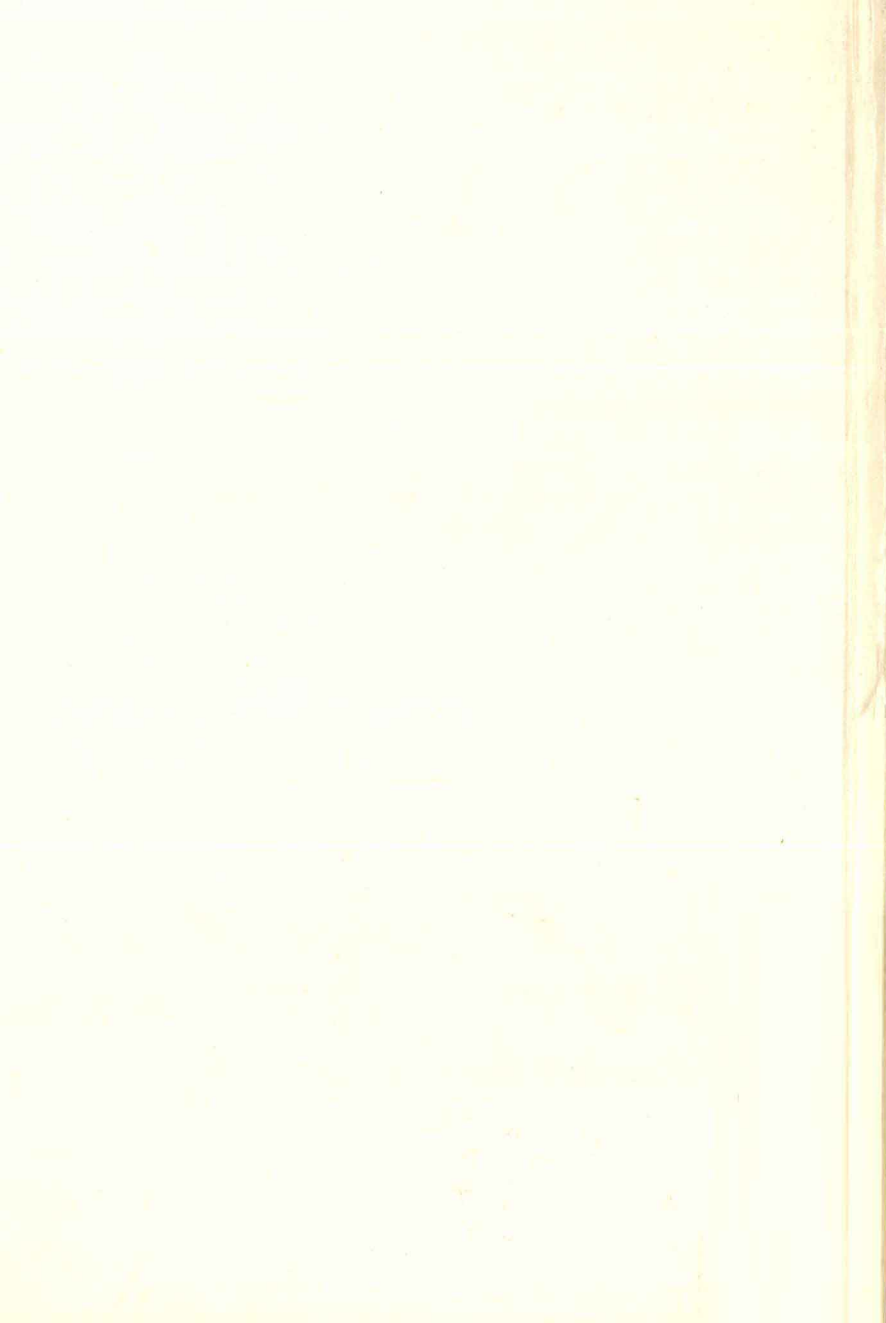




木下杢太郎全集

第八卷

木下幸太郎全集 第八卷

第五回配本(全二十四卷)

一九八一年九月一八日 発行

定価 三七〇〇円

著 者 太<sup>おお</sup>田<sup>た</sup>正<sup>まさ</sup>雄<sup>お</sup>

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五十五  
発行所 鐵 岩 波 書 店

電話 〇三二六五二四二  
振替 東京六二六四〇

印刷・三秀舎 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

# 目次

|              |    |
|--------------|----|
| 山脇信徳君に答ふ     | 一  |
| 無車に與ふ        | 六  |
| 御返事二通        | 八  |
| 一 再び無車に與ふ    |    |
| 二 再び山脇信徳君に答ふ |    |
| 公衆と予と        | 三〇 |
| 海國雜信         | 三七 |
| ロダンの彫刻其他     | 四四 |
| 蘭人接待の古畫      | 四八 |
| 豫感及び模索       | 五四 |
| 海の幸          | 六〇 |

|                |    |
|----------------|----|
| 元素的一概念的        | 六  |
| 後ろの世界          | 七  |
| 海國の葬禮          | 八  |
| 洋畫に於ける非自然主義的傾向 | 九  |
| 劇評             | 一五 |
| 『桐の花』に就いて      | 一三 |
| フユウザン會         | 一五 |
| 光風會            | 一六 |
| 現代大家小藝術品展覽會    | 一四 |
| 小林清親が東京名所圖會    | 一四 |
| ホトトギス催能の所感     | 一六 |
| 「エレクトラ」の實演を嗤ふ  | 一五 |
| 藝術と國民性         | 一六 |
| 文展の洋畫を評す       | 一五 |

|            |     |
|------------|-----|
| 最近洋畫界      | 一九〇 |
| 洋畫と洋畫家     | 一九五 |
| 今秋の洋畫界     | 一九九 |
| 大正二年の文學界   | 二〇六 |
| 二月の文壇      | 二二一 |
| 狂言座を觀る     | 二三二 |
| 陶器に關する考察   | 二三九 |
| 博覽會の日本畫に就て | 二四七 |
| 或る夜のこと     | 二五二 |
| 小笠原の北原白秋へ  | 二五三 |
| 觀劇覚え帳      | 二五五 |
| 高原の秋       | 二五九 |
| 二科會を論ず     | 二六四 |
| 石井君と小杉君    | 二六九 |

|              |     |
|--------------|-----|
| 備忘録          | 二七〇 |
| リイチ氏の陶器展覧會   | 二七六 |
| 文藝の批評に就て     | 二七九 |
| 年頭所感         | 二九三 |
| 歌集赤光         | 三〇七 |
| 日本演劇に關する考察   | 三〇九 |
| 岡本綺堂氏の戯曲     | 三三五 |
| 故平出修君を追懷す    | 三三七 |
| 文壇近事         | 三四二 |
| 最近時事         | 三四五 |
| 小寺健吉作品展覧會目錄序 | 三六一 |
| 新似顔繪雜誌初號序    | 三六四 |
| 隅田川兩岸の風景     | 三六六 |
| 柚木久太郎滯歐作品展覧會 | 三六九 |

|                         |     |
|-------------------------|-----|
| 小寺健吉氏個人展覽會              | 三七一 |
| 谷崎潤一郎氏の戯曲法成寺物語を讀みて史劇を論ず | 三七三 |
| 現代                      | 三六一 |
| 松本博士新著「現代の日本畫」を讀む       | 三六六 |
| 新作評論                    | 四〇七 |
| 所謂問題文藝と理想と              | 四二一 |
| 座頭殺し                    | 四三七 |
| 後 記                     | 四三三 |



## 山脇信徳君に答ふ

九月號の白樺で、嘗て予が貴君の作畫に加へたる批評に對する貴君の駁論を読みました。予が六月の中央公論に出した畫論は筆記者の誤解の爲めに非常な誤のある節もありましたが、幸ひ貴君の畫に關する所には差して誤もありませんでした。而して今とても「怒つた啞者」云々のあまり妥當でない比喩を除ひては、同様に考へておるのです。

而して貴説を讀んでも、予は貴君が予を誤解しては居ないと云ふ事を確信しました。故に貴君と予との説の合はないのは、決して誤解の上に原いてゐるのではなくて、立脚點が相違してゐるといふ事も確かだらうと思ひます。實は問題が興味深い諸點に觸れて居ますから、精細に論じたいと思ひますが、それほどの餘裕がありませんから、唯簡單に、答ふ可き所だけを申して置きませう。

そこで何ういふ點が貴君の立場と予の立場との相違であるかと云ふに、要するに、貴君の所論は純然主觀的であつて、予の論は反之、客觀的であると云ふのが大體の所です。

貴君は畫家としての貴君の人格と、その發現たる繪畫との間に立派な合理、統一があると論ぜ

られます。その論の上に矛盾も無理もありません。然し予は貴君の人格、その作品を、無上のものとして、それ丈離して考へません、それを現代文明の一徴候として見、兩者の間の關係を考へます。

さう考へてゆきますと予の申して、貴君がよくわからぬと被仰つた「理解ある繪畫の約束」といふものも分つて來ませうか。予は決して貴君の所謂「既成の繪畫より得る普遍的な美の概念」のみを以て「繪畫の約束」としたものではありません。予とても美といふものが結晶のやうに固まつて居るものとは思ひません。美とは人の心の一種の状態だと思つております。けれどもこの状態を惹き起す外的所縁として藝術品が必要になります。若し藝術品が單に人心の變動が神經、筋肉に現はれたる發現に止まるものだとなれば則ち止む。更にそれを通じて他人に心(單に思想とはいはず)を傳達する機關であるといふならば、そこに一種の「約束」といふものが必要になる。主觀的の立場から論ずれば、この約束は 個人的 で可いことになる。予の立場から客觀すると、この約束が廣くなればなる丈外延的に價值が増す。といつて無知なる多頭の怪物たる公衆に、最大公約數的に分らせようとする、藝術が墮落する。予とても決してそれまでは言はぬ。そこで兩者の間の關係を熟く理解して、其間に處して、一方には十分自己の内的生命を發表し得、一方には成る可く多くの鑑賞者に了解(同感)せしむる事を得る方法が必要になる。之を予は假に名付けて「繪畫の約束」と言つたのであります。

かう云ふ風に考へてゆくと、予の用語と貴君の用語との間にも著しい感情上の差異のあることが分りませうかと思ひます。予は「表現の技巧」といふ事を申しました。勿論客観上の品藻に適した言葉であると思ふ。貴君は或は「内面の氣分」といひ、或は「技巧の内容」といひ、無論句としては或事物の状態、作用を現はすものでありながら、また明瞭に把住しがたき主観的分子を多く含蓄する言葉を用ゐられました。之は第一の頁丈で搜したものでありますが、ざつとこんな事故、それ故總體の感じからでも、貴君の御文章は事の理を諦めるよりも、信仰せる一物(自己の主張)を説法するといふ格です。丁度佛典などの説き、斷じ、主張しながら、其理を客觀し、證明せぬのと同じです。之れ嚮きに予が貴説に矛盾も無理もないと申した所以であつて且讀者に力を鼓吹する所以です。貴君はペンに畫筆の代用をさせたので御座いませう。茲に於ては議論は證據論に移るより外は無いです。

殊に貴君が自家の作畫を以て「一時の感激に逆上して技術の意味を無視したのでなく」「ラインの運行、トオンの破壊、色彩の寫實的分解、一時的幻覺、補色の配調、筆觸の旋律……」を追求したものであつて「冷靜なる客觀的理解力の進歩は遂に内面と外面との燃焼を誘」ひ、「理解に感情が流れ、意志が熱し、始めて眞の壓迫となり、心臓の鼓動となり、ツツシュに動き、ムウウマンに表はれ、色は光となり、波動となり、音響となり、旋律となつて、自然の精髓に溶けながら」崩れ以

て成れるものであると御説きになるあたりは、普門品に觀音力を説き、起信論に阿賴耶を説くのと一般まことに有り難くなるので御座います。

然し宗教にあの力のあるのは説明の力ではありません、信仰の力です、即ち公衆の求心的團結の力です。それは一方にはドグマを以て衆生を征服する事です。然れば既にドグマは予の所謂「約束」となつたのであります。もし貴君が俗衆をして貴君の藝術を謳歌せしむること、恰も貴君が貴君の藝術を崇拜するが如くならしめようと思ひになるならば、貴君は貴君のドグマを客觀的な「約束」にまでしなければなりませんまい。何となれば證據論には鑑定者が要る。而して鑑定者とは時の眞理乃至勢力の代名詞である。故に貴君は第一に時の輿論を造らねばなりませんまい。それにはどしどしと繪をおかきになる事です。貴君の眼で以て凡ての公衆に入れ目する事です。さういふ曉には予とても昔マネエをかついだゾラの役を演じなければならぬやうになるでせう。

當分予は貴君の「新橋」を賞し、山下氏の作品を鑑賞してゐねばなりませんまい。

\*

終りに一寸一言附け加へますが、血壓計で表はされるものは、脉管と血壓とからの唯簡單な關係だけです。あれから心まで讀むと言ふ事はまだ中々出来ない事でせう。併し一つの血壓計の畫く曲線は、學問の門外漢に比しては其専門家には更に幾倍かの意味のあるものであるのです。即ち血

壓計といふものの「約束」がそれほど専門的で且いよいよ狭いのです。貴君が「技巧の單化と色彩の分析」とに走られるのはよい事です、「繪畫の約束」を極めて狭いものにするといふ事はよい事か悪いことか分りませぬ。予は、白耳義のあのネオエンプレッシヨニストの人などがやつたことは、その理論からいふと繪畫から人格を殺して畫家を生理學的器械とするものではなかつたかと思ふものであります。貴君は「私達の官能世界は直ちに内面氣息であつて繪畫は則ち其鼓動脈搏に過ぎない。私は更に繪畫とは人格であつて技術以上であると言ひ度い。——(但しこの人格とは)人間官能の全部的存在である。」と云はれました。成程繪畫をも色點の集團にしようといふやうな分析の時代に於ては、人間の人格を即ち官能の全部的存在にまで抽象するのは、尤も賢い矯飾マニールでありませうが、予は、外來刺激——人格——反應及び發表といふ三段を以て生活する人間の中心たる人格と云ふものを、もつと廣い意味にとるものである。單に生理學的關係だとするものでない。

そこで今度は予の傾向と理想がはいります。予は局外者として日本の文明といふやうなものを客觀し、その平衡をとる上にも、所謂近世人中の近世人たる van Gogh や Cézanne よりも傳習の調停者と言はれた Manet の理フリスタント解が欲しいと思つてゐるのです。それで随つてあゝいふ風の結論になつたわけであります。

それから後に「氣分」なり「官能」なりが獨立して來たら結構な事でせう。(26. IX. 11.)

## 無車に與ふ

予は十一月號の白樺に於て貴君の予の文章に加へられたる極めて挑發的な批評を讀んだ。一讀してそれが儀容の後ろに隠れたる嘲罵であると云ふ事を知つた。何者それは予の言の細目に就て論評すると云ふよりも實は寧ろ、予の態度(予の人格の第一の發現たる——)を非難し、揶揄するものであつたからである。かゝる別々の立脚地に立つて居て、冷靜なる討論をするなどは偽善者の言ひぐさだ。予も亦一の答辯をなす必要なきを知るのである。唯力めて怒らぬといふ予の主義は、理の諦められる丈は諦め、誤の解かれる丈は解かうといふ事に到着するのである。

たとへば「繪畫の約束」と云ふ事でも、予には必然の理由があつて作られた言葉だ。予は人間界のあらゆる出來事は必ずいはれ、因縁があつて出來た事で、その因縁も、結果も亦人間界のうちに尋ねられる事と思つてゐる。たとへば山脇君の畫風にしろ、それが忽然と謂れなく山脇君に湧いたものではない。予の眼からは、公衆といふものの内の一人なる同君に、他の公衆からの影響がはたらき、それを同君の氣稟とか傾向とかが取り入れ、消化して自分のものにしたのだといふ風に見る。

故に當然また再び他の人々に働きかけ得るものと思ふ。故にその間には必ず何等かの共通分子がある。之を「約束」といふのである。故に「繪畫の約束」といふ言葉のうちにも、人間として感覺の共通、方處の認識の共通、更に細く入りては時の精神文明の共通といふやうな諸要素が含まれてゐるのである。さういふやうに離れて觀ようとする予には、個人の齋く本尊の主觀的の價値をば往々看過する事がある。何者予の欲する所は人間界に起つた一つの事の因果顛末を明かに視ようといふのが主であるからだ。唯予の屢用ゐ慣らした「ねばならぬ」といふ言葉は獨逸語の *sollen* などと同じ心持で「さういふ筈だ」といふ意味である。

かかれば予は、貴君が、萬事を「自己の爲め」といふ大きな主義から演繹する確信ある人なるを知るけれども、敢て其主義を奉ずるといふ事が、いかに貴君に價値あるかを知る爲めに、貴君の主觀に同感しようとはせぬ。却つて傍觀者として、かくの如き原則から出發する判斷が、形式的に合理的でありながら、往々事理の機微を探究し、事象の奥底に透徹する役に立たぬ戲論となり、邪見となる事あるを嗤ふのである。

今かゝる暗指的の言葉を多く用ゐたのは、明かに事情を探究するといふ予の主義に反するけれども、近ごろ予は不慮の事で時日を空費し、事を詳説するの餘裕を失したからである。不盡。(十一月二十一日正午。)

## 御返事二通

### 一 再び無車に與ふ

目下閑を得たから貴君の予に望む所を果さうとするのであるが、然し予は殆ど何も言ふ所なきやうに思ふ。予の感じを正直に告白すれば、貴君と予とは決して知的觀相の上で争つては居らぬ。寧ろもつと原始的の所でして居る。即ち貴君が多分子に對して抱く所の嫌惡の感情が、予等の相乖く所以であると思ふ。此推斷は予の錯見ではないやうで、十一月號の白樺の貴君の書いた「六號雜感」に於て明かにそれを見る事が出来る。彼の文中予に關せる部分は、予が嘗つて山脇信徳氏に答へたる公開の書に對する貴君の感想なるにも拘らず、予の彼の書の言説の相を眞に理解せず、諸諱を諸諱とせず、語勢の那邊に存するかを詳にせず、言説の細目を究めず、恣に予を自家作爲の範疇中に拉して、非議したることその第一である。(之れ予が前號に於て貴説を邪見 *falsche Anschauung* なりとせる所以である。)隨つてまた貴君は自家の抱懷する所を述べるが如くであるけれども、其原



則(？)を彼の具象的な場合に應じて論究せんとせず、予等の(山脇氏對予)論争を批評しながら其論點を外れて、反つて他を言ふに至つた、之れ予の貴君の言説を戲論(Grübelerei)なりとせる所以である。論理、感情の統一はありながら、事の實相を辯ぜざるが故に。

而も貴君の文章は、その言説の相の後ろに一種の感情を潛ましてゐる。之は讀書に慣れたる人には誰にでも直ぐわかる事である。予の解するが如くんば、その感情の主調は憎惡及び譏諷である。之れ予が嚮きになせる推斷の所縁とする所の第二である。而して予が前號に於て、貴君の言説を以て「挑發的」なりとしたる所以である。(少くとも貴君がかの如き肆なる態度で、予等の論争に横槍を入れるといふことは、予には決して貴君に禮あるものと信ずる事が出来ぬのである。)

若し貴君にして故更に知的の觀相を避け、ひたすら感情的に予と争はむと欲するならば、之を以て文筆上の討論は休めねばならぬ。ひたすら感情を以てする争の、何處に其解決を、求む可きは貴君も亦知るならむ。古へ宗教上の各派が宗論に決する能はざりし争を如何に解決したかを考へれば分ることである。貴君にして強ひて最後の解決を求める念があるならば、いかなる方法にても、貴君の要求する所を予は辭せぬつもりである。

然らずして、貴君の邪見が貴君の前號に言はるるが如く、「腦の足りない」所に原くならば、予は少しく辯ぜなくてはならぬ。